



第 19 号

平成29年 7 月 7 日発行
会 員 募 集 中
年会費 3,000 円
10月以降入会 1,500 円

平成 29 年度総会開かれる

大田氏が正式に会長、新副会長に中山氏、雪吉氏

4 月 22 日、平成 29 年度の定期総会が岡山国際交流センターで開かれた。約 100 名が参加。まず、山崎副会長が 28 年度の活動を総括。創設以来、尽力いただいた山本敦事務局長、会計の山本洋子氏が辞任され、事務局長を山崎副会長が、石尾副会長が会計を兼務する形でスタートした。また任期中で、天野勝昭会長、石尾副会長の辞任、退会があり、規約に基づいて会長代行を大田弘之副会長が、会計を山崎副会長が兼務して会務に当たったこと等を報告。そして、会の活動は各委員会を中心に行われたとした。

事業委員会は秋の探訪会、春のウォーキングを行なった。サロン委員会は 3 回サロンを開催した。その模様は会報に掲載された。編集委員会は会報を年 3 回発行した。ページ数を 12 ページに増やし、会員の研究成果の記載が可能になった。

そして、平成 28 年度は初めて収益事業を行った。新春、1 月に「邪馬台国は福岡県にあった—あり得ない畿内」と題する安本美典氏の講演を行った。好評で 200 名以上の参加があった。また、2 月には協賛で「岡山県歴史研究会サミット」を開催したと報告した。

そして 28 年度の事業報告、決算報告が承認された。続いて 29 年度の事業計画、予算案が提案され、承認された。

今年は役員の改選期であり、事務局より、新たな案が提示され、大田会長代行が会長に、新しい副会長に中山亘氏、雪吉政子氏、そして新しい運営委員に富久豊氏、さらに監事の和気島美彦氏が退任し、湯浅一郎氏が就任する案が提案され、承認された。

続いて、記念講演に移り、「山田方谷の人間像」

歴・研・展・望

中学三年生のプロ棋士、藤井聡太四段の衝撃的なデビューと、その後の目覚ましい活躍で、将棋の風景が一変しつつある。

これまでも女子ゴルフの宮里藍、テニスの錦織圭選手の登場で、女子ゴルフやテニスがブームになったことはあるが、今回、藤井四段に注目したのは、将棋を始めたきっかけである。「おばあちゃんと指して、勝つので面白くなって始めた」という趣旨の記事を目にしたが、その「場面」である。

おばあちゃん、おじいちゃんと孫。それぞれの家庭で、様々なかわり方があるだろうが、我々、歴史愛好団体の家庭でも、「歴史」を通じて、孫や子供たちと何か場面が作れているだろうかと、自問した次第。

今春の岡山歴史研究会の総会でも少し触れまし

たが、今この時代に歴史に関心を持ち、学び、研究している一人として、「若い人たちに、どうやって吉備の歴史の素晴らしさを伝えていくか」「何ができるか」と、気になっているテーマのひとつです。

岡山歴史研究会は新年度の組織改革で、会員の中で既に本を出版されている方々を中心に、新しい委員会も立ち上げた。歴史は分からない、難しいと思っている人達に、「歴史の面白さ」をどうやって伝えていくか議論中だ。また、これまでの企画委員会を正副会長会の諮問機関に衣替えしたが、そこでも若い人たちに歴史に関心を持ってもらう方法を議論してもらおう。会員皆さんからも、いろんなご意見をいただければと思っています。

(会長 大田弘之)



大田会長



中山亘新副会長



雪吉政子新副会長



山田敦氏



別所龍次氏

と題して山田方谷直系 5 代目玄孫の山田敦氏が登壇。方谷の孫、すなわち山田氏の祖父は明治時代、夏目漱石と並んで第五高等学校で教鞭を執り、鹿児島に造士館高校（第七高校）ができる時に鹿児島に移ったとのこと、また父は金沢大学で教鞭を執り、山田氏は金沢で生まれ育ったとのこと、そしてご自身は岡山理科大学付属高校の漢文の教員を務めるために、地元岡山へ移り棲んだと話された。方谷の血が脈々と受け継がれていることを紹介された。

そして、方谷の業績を語られた後、最後に方谷の漢詩「對人間備中」を紹介し、全員で音読した。

続いて、別所龍次氏が山田方谷のその七言絶句の漢詩「對人間備中」を詩吟で披露した。

閉会の挨拶は新しく副会長に就任した雪吉政子氏。中学時代の教え子が立派に成長し、詩吟を披露した姿に胸が詰まり、言葉を詰まらせての挨拶となった。

続いて、会場を移して懇親会が開かれ、約 30 名が懇親を深めた。

歴史小説『閨人』及び『閨人Ⅱ』の出版に思う

富久 豊（会員）

趣味が高じて

私が歴史小説を書いてみようと思ったきっかけは、定年後趣味の歴史書をゆっくり読もうと古書店回りをしていた時、ある書店で本居宣長の『古事記伝』の原本に出会ったことに始まる。その解説のため図書館通いをし、学ぶことの面白さに目覚め、特に原本の序文に込められた宣長の研究心の強さに感動したのだ。更に梅沢猛の壮大で遠大な歴史観を著した数々の作品を読んでいる内に、日本の歴史書に秘められた人間模様を書いてみたいとの思いに駆られてしまったのだ。それは、正史と言われる歴史書『日本書紀』や『続日本紀』は、本当に日本の歴史の真実を伝えているのか？。これらの書物は権力の勝者の目線で書かれたものであり、敗者はどの場合でも悪者になり、また蛮人として扱われている。果たして本当にそうであらうか？。そこに多くの疑問が浮かんできたからだ。



富久豊氏

そこで歴史書には詳しく書かれていない反体制派の人物や、同時に権力者の陰で密かに

暗躍する人々を書こうと考えたのが、『古事記』や『日本書紀』それに『続日本紀』などの世界は、一般的には受け入れがたい雰囲気がある。また歴史学者のように研究内容的なものでは益々受け入れられないとの思いから、時代考証や登場人物は歴史書を踏襲し、そこにフィクションを加えながら現代的な小説として表現することにより、解かり易く、また親しみ易くなるのではないかと思い、そのように書き表すこととした。

しかしいざ書き始めてみると、歴史小説は自分の思いや感性だけでは書くことができないものと気付いた。つまり、前述の歴史書以外にも沢山の古文書や神社・仏閣の縁起書、更に現地取材などを行わないと、本当の歴史小説が書けないことが分かったからだ。そこで奈良・京都を中心に、私が思い付く歴史的遺産の遺っていそうな所を巡ね、また地元の役場やお年寄りとも話をした。こうした取材を元書き始めたのが第一作目の『滅びの音（こえ）』である。

この作品は平城京時代の終わりから平安時代にかけて、征夷大將軍として活躍した坂上田村麻呂と、陸奥の英雄、アテルイとの壮絶な戦いに至るまでを、独自の視点で描いた。

ところが、この作品を書きながら次なる作品の

構想が芽生えてきたのだ。つまり日本の歴史の原点である飛鳥・平城京時代を学んでいる内に、その時代の中心的事件である「大化の改新」を、どうしても書きたいと思うようになったのだ。それが前作の『闇人』である。

この作品は、有名な「大化の改新（乙巳の変）」を中心に、この事件前・後の人間模様や世相、それに人間の性とも言うべき権力闘争の様子を、新しい視点から描いた。『日本書紀』によると、天皇家権を脅かすようになった蘇我氏の専横に対して、葛城皇子（後の中大兄皇子）と中臣鎌子（後の藤原鎌足）の二人が手を結び、蘇我氏親子を失脚させたのが「大化の改新」だが、そこに蘇我氏の失脚を望む山師集団加茂一族を後ろ盾として加え、蘇我氏打倒に突き進む過程を表した。その後、二人はどのように政権運営を行うのか・・・そうしたことを複雑な人間関係を交えながら描いたものです。

そして今回は前作の主人公藤原の鎌足に続き、息子の藤原不比等の生涯を描いたのが『闇人Ⅱ』なのです。

この作品は天皇候補同士が戦う「壬申の乱」から始まり、不比等が権力基盤を固めてゆく道程と、同時代に生きた謎の万葉歌人柿本人麻呂との確執も描きました。

こうして約十年間で三作品書きましたが、実はこの物語は時代的に繋がりを持っており、『闇人』・『闇人Ⅱ』・『滅びの声』の順に、日本の黎明期飛鳥・平城京時代から平安時代にかけて、大和政権が中央集権体制を確立していく過程をえがいたことになるのです。大和王権は領土や資源を求め、征伐と称して陸奥の小国を次々侵略していきながら、その中で激しい抵抗を試みた民族を蝦夷と呼び差別し、侵略の正当性を主張したのだと思う。こうした歴史書には書かれていない部分をフィクションで埋めて書き上げ、反体制派の人々にも光を当てたつもりです。

本来なら、岡山歴史研究会々員の皆様にはぜひともご一読いただきたいのですが、紙面の都合上この三作品の内の『闇人』と『闇人Ⅱ』の「序章」部分を紹介致します。

序 章 『闇 人』

大和は、国のまほろば、たたなづく、青垣山、隠れる、大和し、愛し。

日本武尊が望郷の想いをこめ、このように歌った奈良盆地の南に位置するここ飛鳥の地は、比較的气候も温暖で、しかも初瀬川や飛鳥川など、笠

置山地や金剛山地から流れ出る大和川の支流に支えられた肥沃な土地があり、農耕に適した暮らし易い所であった。また、大和川を利用した難波津からの水運にも恵まれ、さらに、畝傍山・耳成山・天香具山に代表される丘陵地には、風光明媚な趣のある美しい所だ。そしてもう一つ、この盆地を取り巻く周りの山々は、四季折々の遊興と信仰の対象として、大和人達の生活に深い関わりを持っていたのである。そのため、この飛鳥の地の争奪を巡り、古の昔から兵どもが様々な権力争いを繰り広げ、悲喜劇の舞台ともなっていたのだ。そうした様々な権力争いの中でも、最も有名で、そして最も謎に包まれた事件が、俗にいう『大化の改新』（今は、乙巳の変と教えている）であろう。この事件の主役の一人である藤原鎌足が祀られている談山神社。この談山神社に伝わる『多武峯縁起絵巻』には、葛城皇子（後の中大兄皇子）や中臣鎌子（後の藤原鎌足）が蘇我入鹿を暗殺する場面が描かれており、それは諸説を交え鎌子を勇ましく、そして入鹿の首が高々と御座の上まで飛んでいる場面が描かれている。そしてメディアもまた『大化の改新』といえ、必ずこの場面を引用して報道している。しかし、正史『日本書紀』には、そのようには書かれていないのだ。だが、入鹿という時の大臣（治世の最高責任者）が葛城皇子を中心とした数人の男によって不意を突かれ、大安殿で惨殺されたことは事実であるらしい。まだ二十歳になったばかりの天皇（皇極天皇）の皇子・葛城皇子が、それまで無名の中臣鎌子なる人物と組んで時の大臣を暗殺したのも凄い話である。だが、そこへ至るまでの過程で様々な運動が起こり、蘇我宗家を揶揄する童謡や、巫覡の抵抗なども起きている。『日本書紀』には「大化の改新」に関わった数名の名前しか記されていないが、彼ら以外にこうした運動を後押しし、決して表には現れず、組織的に動いた集団がいたのではないかな。でなければこうした大事件は成就しなかったであろうし、その後の政権運営もスムーズには行えなかったであろう。更に、大臣を亡きものにし権力を手中に納めたはずの葛城皇子が、何故か天皇に即位せず、その後二度に及ぶ即位機会をも回避したのだ。何故なのか？・・・そして今ひとり、中臣鎌子もまた「大化の改新」以後二十四年もの間、死ぬまで内臣を続け、決して左大臣とはならなかった。葛城皇子と中臣鎌子、共に不思議な行動を取ったふたり。この物語は謎に包まれた二人の行動と生涯、そしてこのふたりを支えた“謎の集団”を新しい

観点から描いたものである。

序 章 『闇人Ⅱ』

時代は七世紀後半（西暦六七一年）、大和政権に試練が訪れようとしていた。二十六年間に渡り実質的な政の権限を握り、一応安定してきた天智天皇が病の床に伏し、余命僅かと目され皇位継承問題が生じてきたのだ。それは偉大な権力者故の難しい問題を孕んでいた。

実はこの時代の大和政権の権力構造は、天皇を頂点に有力豪族がそれを支え成り立っていた。その豪族も雄略天皇（第二十一代）以前から王権を支えてきた豪族を古開系氏族、それ以降に渡来し王権と結びを強くした豪族を今来系氏族といって暗黙の分類がなされ、夫々が利権と勢力圏の拡大のため権力争いを行ってきた。そのことが皇位継承の折、双方の思惑と絡み合っただけで複雑な人間関係をつくりあげていたのだ。

豪族たちは海・山・川・農地からの食糧・資材などを朝廷へ納めていたのだが、その中でも特に鉱物資源の発見・発掘や山林の開発、物流、運搬を担ってきた山師は、陰の存在ではあるが強い影響力をもっていた。そうした山師もまた古開系山師と今来系山師とに分かれていて、時の権力者はその山師の技術と財力を味方にしながら開発と整備を行い、新宮殿や京づくりに利用していたのである。そして天皇はこうした豪族の娘を皇后や妃として迎え、皇子が誕生すると次期天皇候補となり、その豪族が中心になって新しい天皇を支えるのである。表面上男性社会の政治的権力を背景に時代が動いているように見えるが、新宮の建設や財政的基盤は皇后の出身地の豪族が影響している事が多くある。だから天皇の権力の維持には豪族の支持が重要なのだが、皇后の出自もまた大切な要件なのだ。

そうした中、時には天皇を凌ぐ勢いと権力を有する豪族が現れる。それが蘇我宗家一族であった。蘇我宗家は天皇の即位までも意のままに行い、時には意に沿わぬ天皇を暗殺し自らの意向を反映できる者を即位させ、天皇の政の権力を骨抜きにしまったのである。だが、この蘇我宗家の横暴を阻止しようとする人物が現れる。西暦六百四十五年、蘇我蝦夷と蘇我入鹿が実験を握っていた折り、時の天皇が（皇極天皇）の皇子（葛城皇子・後の中大皇子・天智天皇）が中臣の連鎌足（後の藤原鎌足）の助けを借りて入鹿を殺害、蝦夷も自害に追い込み蘇我宗家から権力を奪い返した。こ

れが「乙巳の変（大化の改新）」なのである。

この時葛城皇子を助けて「乙巳の変」を成功に導いた鎌足には、彼を陰で支える古開系の山師集団がいた。その集団は古開系山師を束ね葛城山麓に拠点を置く山師集団、高加茂君一族なのだ。彼らが鎌足を助けたその理由は・・・

一族の総帥高加茂君小角（役小角＝役行者）は、幼少の頃から葛城の相伴夫人の屋敷にあずけられていた鎌足を知っていて、一族の館で勉学の手解きなどもしていた。そんな鎌足が成長し、小角はその頭の良さと野望を見抜き、利用できる人物だと考えていた。そして葛城皇子もまた幼少から青年期まで葛城の里で過ごし、山師小角のことは知っていた。だから葛城皇子が二十歳になり“蘇我宗家の横暴を何とかしたい”と小角の処に訪れた時、彼は迷わず鎌足と結び付け陰で支えることにしたのだ。そもそも蘇我父子も古開系氏族でありながら、新しい技術を持ち、不満を抱えていた今来系山師を取り込み、古開系氏山師をないがしろにした。これに不満を持っていた小角は丁度良い機会だと考え、皇子と鎌足を側面から応援（詳細は『闇人』＝文芸社で紹介）し、蘇我入鹿の暗殺を成功に導かせたのである。

天智天皇の登場により権力を回復した古開系山師なのだが、信頼していた鎌足が亡くなり、今また天皇が病に伏し、権力の維持に暗雲が漂い始めていた。それは天智天皇が病に倒れ、天皇の皇子の一人大友の皇子が皇位に継ごうとしていたのだが、ここに問題が起こるのだ。

天皇には父親が違う弟（実際には兄）がいた。大海人皇子と言い、この時政権の中核にいて東宮職にあり、大皇弟とも呼ばれ人望も厚かった。その為重心の中にはこの皇子を天皇に推す人物もあり、特に出生の関わり（凡海連一族）から今来系氏族が多くいた。だが、天智天皇は大海人皇子よりはるかに若い大友皇子を太政大臣とし、政権の頂点に置き天応の意志を示したのである。更に現政権の重臣である左大臣・蘇我臣赤兄、右大臣中臣連金、蘇我臣果安・巨勢臣人、紀臣大人など五人と大友皇子との間に誓約を交わさせ、大海人皇子に対する包囲網をつくるのだ。だが、こうした天皇の動きを遠くで眺めていた古開系山師の小角は、何故か現政権の結束に不安を覚えていたのだが、皇位継承問題だけに直接言及することも出来ず、ただ暫くは静観することにしたのである。

だが、こうして直接或いは間接的に政権と関わりを持つ人々は、自らの責任において行動できる

のだが、政治・権力の争いから置き去りにされた人々（女・子供・文人・歌人等）は、自ら武器を持って参加することも叶わず、ただ不安げに権力争いの納まりを願い、静かに時の流れを待っているのである。そしてこの時代に生きた歌人・柿本人麻呂もその一人で、権力者の思惑に翻弄されながら自らの意志を貫き散っていくのだ。

いずれにしても天皇、大友皇子と古関係氏族、そしてそれらを陰で支える山師たち。夫々の思惑が見えない糸で絡み合いながら、この物語の舞台が動き始める。

歴史から見えてくるもの

この物語を書きながら思ったことは、人間の言葉や文化は変化しても、精神的営みは昔も今も殆ど変わっていないということだ。家族を想い、血縁を大切にすることは普遍的であり、それを最もよく表しているのが皇位継承問題であろう。

実はこの物語を書いた時代に沢山の女性天皇が出現している。我が国の一二五代続く天皇制の中で、女性天皇が 10 代 8 人（皇極・斉明と孝謙・称徳が重祚しているから）存在しているが、その中の 8 代 6 人が、この時代に集中しているのだ。後は江戸時代の第 109 代明正天皇と第 117 代後桜町だけだ。また長い天皇制の歴史の中で天皇が重祚しているのは、この飛鳥・平城京時代の女性天皇二人だけである。更にいえば生前退位をした天皇の地位を守り、幼い天皇を補佐する目的で作られた太上天皇という新しい位もまたこの時代からである。こうした背景には、“わが子を天皇に”、“我が子を権力の頂点に”という思いと“我が血縁を守りたい”との考えが強く働いたことは間違いないであろう。同時に権力争いの道具にとして利用されたことも、否めない事実である。

このようなことは現代社会でも日常的に起こっており、千数百年経った今でも変わることのない人間の性であり営みである。多分永久に続くのであろう。

ちなみに「大化の改新」では、我が国最初の生前退位（攘夷）が行われたのだが、現代のように国会で審議されることもなく、皇極天皇は事件後すぐに弟の軽皇子（孝徳天皇）に位を譲ってしまった。こうした譲位はこの後頻繁に行われ、今日まで五十数回行われている。

戦後、人間天皇を宣言し、象徴天皇となられた昭和天皇、そして今上天皇が、自らの意志で退くことができない今の制度は、果たしてどうなのか？人

間として生きるのが先か？象徴が優先するのか？今後私たちに突き付けられた大きな問題である。

第二の人生

言い古された言葉ですが、“定年後は第二の人生がある”。と言われてきました。私の場合は、この言葉を深く考えたこともなかったのですが、今にして思うとこの言葉のようになった気がします。

もともと定年後は好きな読書をし、“呆け防止のため”と思い文章を書き始めたのですが、本を出版したことにより思わぬ副産物を生みました。それはサラリーマン時代とは全く違った人脈と、上下のない人間関係です。

例えば、趣味を通じてある団体に加入することにより、相手の地位や立場を気にすることなく自由に話し合い、また相手も一個人として尊重し合える関係ができる。これは多分利害関係が全く伴わない世界だからこそ、なし得ることなのであろうと思われる。こうした団体での様々な職業の人、また様々な地域の人との交流から、沢山の知識と感動を得ることが出来ました。

大阪枚方市の「伝アテルイ・モレの塚保存会」会長中野一雄氏、事務局長で片埜神社宮司岡田広幸氏、また「関西アテルイ・モレの会」会長和賀亮太郎氏、またこの会が主催する京都清水寺での「慰霊供養の法要」で知り合った胆江日日新聞社安彦公一氏、清水寺学芸員加藤眞吾氏、そして森精清海範管主様の講和をまじかで聞くことが出来たことなど、様々な出会いが新しい感動を呼び、この感動が人生の生きるエネルギーとして作用し、次なる作品への意欲を与えてくれたのは、間違いのない事実だと思う。そして今一つ岡山歴史研究会の皆様からも沢山の感動と勇気を貰ったことも、是非加えておきたい。

また最近思うことは“緑の糸”という言葉だ。それは自分が全く予期せぬところで、共通の知人がいたことだ。つい先日も岡山歴史研究会の山崎副会長と話していた折り、ある人の名がでたのだが、その方とは私が赤磐市在住の時、町の活性化を図る取り組みで一緒に活動し、今でも年賀はがきの交換や時折会ったりもしている方なのだ。こうした全く予期せぬ共通の知人の繋がり、自分の意志とは関係なく流れ、良い環境を生み出しており、正しく見えない糸“緑の糸”で結ばれているような気がした。こうした関係をこれからも続け、沢山の人々から感動を貰い、残りの人生を謳歌したいものだ。

歴研サロン 3 月例会**『中国銀行五十年史』より見た銀行の発展と逸話を講演して一前編****高橋 義雄**（会員）**高橋義雄氏**

去る三月一〇日、『中国銀行五十年史』より見た銀行の発展と逸話』と題して講演を行いました。会場には約四〇名と多数の方々にご越し頂き、誠にありがとうございました。その要旨をご報告申し上げます。

一 はじめに

明治新政府は、西欧の先進諸国に対抗するために、政治経済制度の近代化と殖産興業を急いだ。明治二年、フランス博覧会先導諸国を視察して帰国した渋沢栄一（以下栄一という）は大蔵省に採用された。栄一は貨幣及び金融制度の制定に着手するとともに「株式会社制度」の啓蒙と会社設立を勧奨する。

（逸話：①株式会社制度は簿記とともに、人類最大の発明といわれる。栄一は五〇〇という多くの会社を設立した。②栄一は論語を基に、漢学者三島中洲（以下中洲という）が樹立した「義利合一説」（「義は利の本なり」）を導入して、「経済道德同一説」を唱え経済界を指導し、『論語と算盤』を著した。栄一は「日本資本主義の父」と敬称される。日本は明治初期に株式会社制度を移入したことにより、高度資本主義国家として発展するに至ったのである。）

二 国立銀行と私立銀行の設立**（１）国立銀行と私立銀行の設立**

政府は米国の銀行制度を移入して、明治五年十一月に「国立銀行条例」を公布した。国立銀行は銀行紙幣発行の権利を有することから、政府は多くの設立を目論んだが、四行しか設立されなかった。そのため、明治九年に国立銀行条例を改正して、華士族に交付する金禄公債証書を活用できるようにした。国立銀行設立が容易になると設立が相次いだので、政府は明治十二年度末に、京都第

百五十三国立銀行を最後として設立認可を停止した。

他方、明治四年頃から設立されていた銀行類似会社は相次いで銀行へ転換した。私立銀行の嚆矢は三井銀行で、銀行類似会社三井組が明治九年七月に改組したものである。

（逸話：①「銀行」という言葉は栄一の造語である。栄一は最初「金行」という言葉を考えたが、落ち着いた響きのある「銀行」を採用したという。②国立銀行は株式会社として設立された私立銀行である。英語の「ナショナルバンク」を国立銀行と訳したため、誤解が生じている。③イタリア語で貨幣を両替する机の名称「バンコ」が、英語の「バンクに」なった。）

三 岡山県内の国立銀行と私立銀行**（１）第二十二国立銀行の設立—岡山県内の銀行の魁—**

岡山県内では高崎五六県令が国立銀行設立を勧奨した。それに呼応して、県内初の銀行となる第二十二国立銀行が、明治十年十月、岡山区に資本金五万円で設立された。旧岡山藩主池田慶政や旧藩士花房端連、杉山岩三郎等によって設立され、翌年五月に開業した。次いで高梁に第八十六国立銀行が設立された。

（２）岡山県内の私立銀行の設立

岡山県内の私立銀行の魁は明治十二年十二月に、津山に設立された津山銀行である。設立には旧津山藩士や御用達の森本家等が参加した。翌年の明治十三年から私立銀行の設立が県下に相次ぐ。明治二十四年には倉敷銀行が設立された。その結果、明治二十六年末には岡山県内の銀行数は、国立銀行二行、私立銀行が十二行の合計二四行に達した。

四 第八十六国立銀行と倉敷銀行の設立**（１）第八十六国立銀行の設立—中国銀行の淵源**

備中松山藩主板倉勝静は幕末に老中であったため、松山藩は明治新政府から朝敵と見なされた。

明治二年、松山藩の石高は五万石から二万石に大幅に減封されたため、地域経済は極度に疲弊、旧士族達は困窮に陥った。政府の要請により旧藩士の川田甕江は明治四年に、同じく中洲は明治五年に上京し政府に採用された。裁判官を退任した中洲は、方谷の遺志を継いで明治十年十月十日、漢学塾二松学舎（現二松学舎大学）を設立した。

次いで中洲は高粱の産業振興と経済復興のために銀行設立を図り、明治十年秋、銀行設立方法を旧知の栄一に尋ねた。栄一は既に大蔵省を退職していたので、旧部下の外山脩造（以下脩造という）に指導を指示した。中洲は脩造に漢詩文を指導したことがあり、設立申請に際して適切な指導を得て、明治十一年十二月、大蔵省から設立認可状の下付を受けたのである。

（逸話：①中洲が銀行設立に尽力したという史実は、『中国銀行五十年史』の編纂途次に提供された中洲の書簡によって、はじめて日の目を見た。第八十六国立銀行第二代頭取の曾孫堀慶介氏（高粱市在住、医院経営）が保存していた中洲の書簡に、設立経緯が詳細に記載されていたのである。②次いで、日本銀行で第八十六国立銀行発行の紙幣が発見された。第八十六国立銀行紙幣は幻の紙幣といわれていたので、この発見も僥倖であった。③中洲は漢学塾二松学舎の創立者として有名であるが、銀行設立に関する史実の発見は金融史研究者やメディアが注目した。④脩造は後に大阪財界の巨頭として活躍し、中洲と終生親交を続けていたが、大正五年に死去した。中洲は恩義に報いるため直ちに撰文して、巨大な記念碑を栃尾市（現長岡市）に建立した。）⑤中国銀行は前身の第



中国銀行旧本店

一合銀行、山陽銀行以来岡山、広島、香川、兵庫等の各県に所在の銀行七十数行を合併した。第八十六国立銀行は其中最も歴史が古いことが判明し、「中国銀行の淵源」と定めた。）

（2）倉敷銀行の設立と躍進

倉敷の大地主の大原孝四郎は明治二十一年三月、資本金十萬円で倉敷紡績所（以下倉紡という）を設立した。倉紡は金融機能の必要性から明治二十四年四月、資本金三萬円で倉敷銀行（以下倉銀という）を設立した。初代頭取は大原孝四郎、本店は窪屋郡倉敷町に置いた。（現倉敷市本町、元中国銀行倉敷支店）倉銀は明治二十九年に他行に先駆けて貯蓄部を新設し、預金増強に励む。明治三十九年九月、二十六歳の大原孫三郎（以下孫三郎という）が倉紡社長及び倉銀頭取に就任した。明治三十四年岡山に波及した金融恐慌においても、倉銀は預金取付けを受けず、明治三十六年には岡山県下の預金順位を第六位に躍進させた。他方、孫三郎は倉紡において積極的に設備拡張と紡績会社の買収を進める。中四国地方に工場を増設し、理想的な労働主義と博愛主義、人道主義に基づく経営を行う。遂に倉紡は全国の十大紡績会社の一角に名を連ねる迄に発展した。

（逸話：孫三郎は明治三十七年に家督を継ぎ、父祖の莫大な資産と父から道義観念を継承した。孫三郎は孤児院経営者の石井十次に邂逅して精神的な改革を起こし、『聖書』、『報徳記』（二宮尊徳著）、仏經典等を熟読して人道主義等の近代的理念を培った。資産を神から受けたものとして社会還元することを決意し、孤児院への支援をはじめ、大原美術館、大原社会問題研究所、大原農業研究所、倉敷中央病院等の設立に役立てた。土屋喬雄東大教授は孫三郎に注目し、「明治維新後、我が国の近代資本主義の中で、最も進歩的な経営者の一人」と高く評価した。）

五 二十二銀行の経営不安と都市銀行の資金流出問題

（1）二十二銀行の経営不安と安田銀行の支援

第二十二国立銀行から転換した二十二銀行は、資本金、業容ともとも県下の銀行を圧倒していた。

しかし、岡山紡績に多額の融資があり、預金者に不安視されていた。明治三十四年、金融恐慌の折、井原銀行、岡山市内の御野銀行が支払い停止に陥り、二十二及び山陽商業の各行に預金取付けが発生した。経営不振に陥った二十二銀行は安田銀行に支援を求めた。その結果、二十二銀行は安田銀行の支配下となり、岡山における中心銀行でなくなり、貸出態度も地元企業に厳しくなる。

（２）都市銀行の資金流出問題

明治後期から大正初期の企業勃興期に岡山県内にも多数の都市銀行や県外銀行が進出した。大正六年では岡山県内銀行は五十三行、都市銀行五行、県外銀行十一行の計六十一行が熾烈な競争を展開していた。都市銀行は岡山で吸収した多額の資金を三大工業地帯の本店に送金していた。そのため岡山では金融が逼迫して金利も上昇し、貸出姿勢も厳しくなる。商工業団体、新聞からの批判も厳しさを増していく。経済界は金融の円滑化をはかるため、岡山市に大規模銀行の設立を渴望する。

六 第一合同銀行と山陽銀行の誕生と競争

（１）倉銀を核にした六行合同を企図

大原頭取は倉銀を核として、周辺の小規模銀行を合併する構想を描く。大正六年十二月、倉銀の資本金を一挙に百万円に増資した。中備銀行頭取溝手保太郎、茶屋町銀行頭取佐藤栄八等を株主に加え、溝手頭取を倉銀の取締役を選任した。そして中備銀行との合併を図ったが失敗した。次いで大正八年六月、経営不振中の福山貯蓄銀行を倉銀に合併させた。大正八年三月、大原頭取は笠井岡山県知事の下、倉敷商業、鴨方倉庫、茶屋町、日笠、天満屋の各銀行頭取に同時合併案を示した。各行頭取は時宜を得ているとして合併に賛成したので、設立申請を大蔵省に提出した。大蔵省は六行という多数の同時合併は画期的なことなので「第一合同銀行」という銀行名を勧めた。大正八年九月三〇日、資本金六五〇万円の大規模な地方銀行の第一合同銀行（以下第一合銀という）が岡山市に設立された。大原頭取は、発議から一年足らずで地方的大合同を成し遂げたのである。大蔵省は銀行合同の典型として『明治大正財政史』に記述

した。大原頭取は地方的銀行合同の先駆者とされたのである。

（２）第一合同銀行と山陽銀行の競争

第一合銀は営業エリアの拡大と経営基盤強化を図って岡山県内だけでなく広島、香川、兵庫等の各県の小銀行の合併を行い、中には政府の要請で救済合併も行った。大蔵省は相次ぐ預金取付けや経営破綻の防止、信用体制強化のために小規模銀行の増資と合併政策を強行していく。

小銀行の合同の波は岡山県北にも及び、大正十三年七月、苫田郡津山町に資本金一千二万円の山陽銀行（以下山銀という）が設立された。山銀は業容と営業エリアの拡大のために、岡山県南や広島県内に所在の小銀行を相次いで合併し、岡山支店も設置した。こうして第一合銀と山銀は合併競争を展開していったが、不良資産を抱えている小銀行や経営不安の銀行も含まれた。

七 中国銀行の誕生

（１）第一合銀と山銀の難渋の経営

大正十二年の関東大震災、昭和二年の未曾有の金融恐慌から、日本経済は極度の混乱に陥った。華族銀行といわれた十五銀行や大銀行も預金取付けを受け、経営破綻に陥っていく。第一合銀も山銀も自身も不良資産を発生させて償却が追いつかなかった。大蔵省は両行の多額の不良資産を指摘して、両行に改善策を要求した。懸命の努力も空しく、改善は困難なため両行は、「小異を捨てて大同につく」との精神で、合併に踏み切る。

（２）中国銀行の誕生

両行は昭和五年十二月二十一日、合併を行って遂に中国銀行が成立した。銀行名は「中国地方に覇を唱える」ことを願う井上準之助蔵相が命名した。同行は岡山、広島、香川、兵庫と四県に亘る広域店舗網を持ち、大資本と業容を擁する銀行が誕生したのである。全国の地方銀行に先駆けて、一県一行が完成した。粕谷誠東大教授は岡山県内では、第一合銀、中国銀行と大規模な銀行が成立したことにより、大規模な預金取付けや銀行破綻が生じなかったと指摘している。大原頭取の先見性発揮の御蔭である。

備 前 片 上 地 域 ウ ォ ー ク

事業委員 井上 秀男

3月18日、今年の新春ウォークとして、備前片上近辺の史跡を巡りました。23名が参加。朝、10時に西片上駅に集合。史跡のガイドは備前市観光ボランティア協会の片山伸栄さんにしてもらい、史跡ごとに詳しい説明を聞いた。

片上地域の有名な史跡に御滝山真光寺がある。真言宗の古刹で、本堂と三重塔は国の重要文化財に指定されている。境内には古い蘭塔、五輪塔が見られ、寺の古い歴史を物語っている。

片上の宇佐八幡宮は、当時、片上の小国氏は足利尊氏との関係が深く、足利尊氏の戦勝祈願を小国氏が片上八幡宮にしたところ成就したと伝えられている。小国氏は片上の本陣を務めた旧家で、小国宅跡が史跡として残されている。

片上で最古の旅館として有名な、安政3年(1856年)創業の恵美須屋、荒木旅館がある。多くの文化人、芸能人達が入り出し、旅館内には数多くの貴重な資料や書画が保管されている。私も一度宿泊したことがあり、いろいろのものをみた記憶があります。

備前片上には、中世の山城として富田松山城があ



お夏茶屋跡にて

る。標高 209 m、輪郭式山城で、築城は文明年間であろうといわれている。天文年間の城主は浦上国秀(1532年～1554年)であったとされていて、後は不明である。城の配置図からみるとかなりの規模をもっていた城郭である。

片上の文学者で、「罪な女」で直木賞を受賞した藤原審璽が住んでいた住居跡を見て、次の歴史民俗資料館に入館した。備前市の歴史に関係するものを展示してある。備前焼の年代、窯の構造等についてガイドの片山さんの説明に熱が入る。昔の小さな港町の片上という地域の史跡ウォークで、今まで知らなかった歴史を学べることができ、参加者の皆が楽しんで帰られたように感じられた。

会費納入のお願い

今年、平成 29 年度の年会費、3,000 円を未納の方は下記の口座まで振り込みいただきますようお願い致します。

ゆうちょ銀行

口座記号：01330-7

口座番号：99129

加入者名：岡山歴史研究会

歴研サロン 5 月例会

山崎泰二氏講演「米と稲の文化」を聞いて

井上 秀男

去る 5 月 25 日、岡山市ゆうあいセンターにて山崎泰二氏による「米と稲の文化」と題する講演が行われた。多数の参加があった。準備された豊富な資料をもとに、第一章～第三章まで、項目でまとめられ、各章について順次、話を進められた。

第一章では稲作に関する基礎知識として、お米のこと、藁のこと、粳、米糠等についての説明があつて、稲を刈り取ってから白米になるまでの過程で副産物として産まれるものを生活の知恵として利用してきた日本の文化がいまに残っていることに気づかされた。

第二章ではエコ堆肥（生ごみを利用した堆肥）について、家庭から出る生ごみを利用した堆肥の作り方で、家庭で捨てられる栄養価の高い廃棄物を生き返らせる「エコちゃん堆肥製造装置」を作つて堆肥を作成し、園芸に利用して薬害のない野菜作りをしている色々な例を取り上げて話された。

第三章では稲の歴史について話された。稲作文化が日本に伝わってきたルートについて、インドから中国の長江の下流域から朝鮮半島を経て九州へ伝わったとされる遺跡が佐賀県唐津の菜畑（なばた）遺跡や福岡市の板付（いたづけ）遺跡等に跡が残っている。稲作の起源地としては中国の長江を少し遡った中流域の湖南省や浙江省が知られ、浙江省の河母渡（かぼと）遺跡から稲の粳や稲作に使用されていた道具類が発掘されている。約 7,000 年前の遺跡とされている。

しかし、岡山県でも 1999 年（平成 11 年）4 月 22 日、各新聞紙上に岡山市街の北に位置する朝寝鼻（あさねばな）貝塚で国内最古、6,000 年前の稲作の痕跡が見つかったという記事が載っ



山崎泰二氏

た。この発見に至った研究チームのリーダーは考古学者で有名な高橋護氏（元ノートルダム清心大学教授）である。プラント・オパールという物質が稲科食物の細胞には含まれており、これは珪酸体を含むもので、化石化するとプラント・オパールになるという。これを検出することで過去の植生や栽培植物の種を判別することができるということ。プラント・オパールが発見された遺跡としては、真庭郡美甘村の姫笹原（ひめささはら）遺跡から出土した土器片から発見されたもの、倉敷市矢部遺跡、倉敷市福田町古城池にある福田貝塚の土器片から発見された約 4,500 年前の縄文中期の遺跡がある。

平成 22 年、稲作の遺跡として岡山市原尾島遺跡で稲株跡が発見され、弥生時代末期（1,700 年前）の水田跡の遺跡であることがわかったとのこと。岡山県も早くから稲作文化が開けた古い歴史のある郷土であることをサロン会例会の講演を通じて知らされた次第です。（会員）

訂正

前号、第 18 号において写真に誤りがありました。お詫びして訂正します。

10 ページ、岡山県歴史研究会サミットの顔写真で蒜山高天原神話ロマンの会代表の宮永優氏の顔写真が間違っていました。正しくは右記の写真が宮永優氏です。



岡崎嘉平太氏を顕彰する 岡崎嘉平太記念館

岡崎嘉平太記念館 館長 勝野 将之

岡崎嘉平太記念館は、我が国の経済界の発展や日中国交回復に大きな役割を果たした岡崎嘉平太氏の功績をたたえとともに、地域文化の振興に資するために平成 13 年 8 月、岡山県が岡崎氏の生誕地、加賀郡吉備中央町の中心商業施設「きびプラザ」の一面に設置し、無料開放している施設です。

記念館では遺族から贈られた遺品を中心に約 7,600 点を収蔵し、このうち常設展示室では、岡崎氏の書を始め中国の要人から贈られた品、訪中時の記念品や全日本空輸（株）から寄託された飛行機の模型など、岡崎氏を偲ぶ品が展示してあり、書斎の復元コーナー、ビデオコーナーも設けられています。

また、企画展示室では、秋の特別企画展として岡崎氏の生涯における様々な活躍や功績、人物像などを新旧の収蔵品により多角的に紹介するとともに、「岡崎嘉平太がめざした世界平和の道を考える」講演会では、毎回、岡崎氏ゆかりの方や大学、政財界など幅広い分野から講師を招聘し、好評を博しております。さらに、地域に開かれた記念館を目指すべく、ワークショップや出前講座、来館講座など多岐にわたり顕彰活動に取り組んでおり、平成 28 年の 12 月には来館者 20 万人を達成しました。

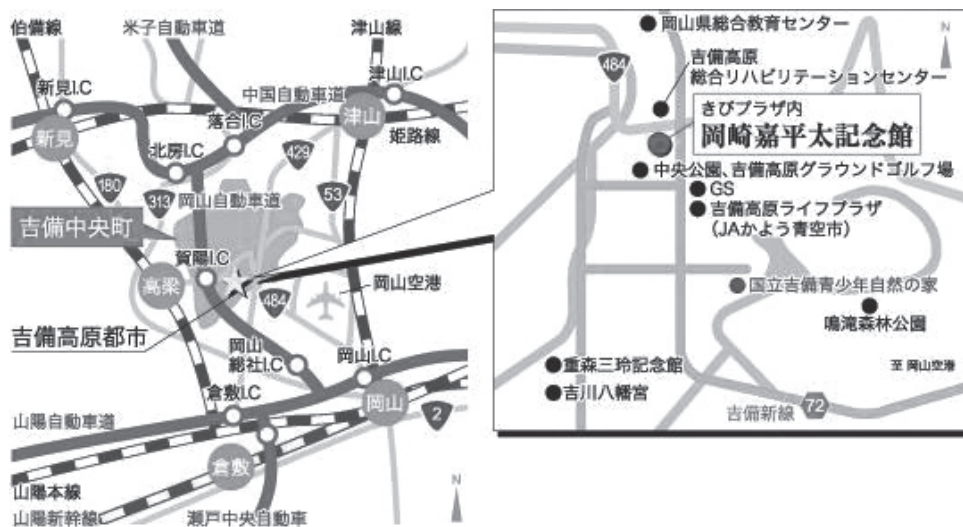


岡崎氏は、1897 年（明治 30 年）に岡山県吉備郡大和村で生まれた。小学校 1 年生の時に自宅が焼失して、総社町（現総社市）に転居。父は間もなく渡米し、1917 年（大正 6 年）に客死したので、母に育てられ、県立岡山中学入学後は寄宿舎に入り故郷を離れました。旧制第一高等学校、東京帝国大学を卒業後、日本銀行に入りドイツにも駐在しました。1938 年（昭和 13 年）陸軍省事務嘱託として上海に駐在、翌年、華興商業銀行が設立されると理事となるため、日銀を退職します。その後、大使館員として上海に勤務しました。学生時代の中国人留学生との交わりから中国に深い関心を寄せ、生涯を通して日中の友好と共栄の理想を胸に秘め尽力しました。第二次世界大戦後、戦後処理を済ませて 1946 年（昭和 21 年）に帰国、公職追放の身となりますが、（1950 年解除）その後は数々の企業の再建や設立に携わり、中でも航空会社の経営参画では、日本の民間航空事業の発展に大きく貢献しました。さらに、戦後の日中国交断絶時代に貿易の発展を通じて、国交の早期回復を願い日中覚書貿易の中心的役割を担って国交正常化を実現に導いたことは特筆すべきことです。

常に、高い志をもち、信頼と愛情に満ちた岡崎氏の人物は、人々の敬愛的であり、数々の功績に対し、勲一等瑞宝章、吉備中央町名誉町民、総社市名誉市民、岡山県名誉県民章等が贈られています。

平成 29 年は岡崎氏の生誕 120 年及び日中国交正常化 45 周年という節目の年に当り、記念館では記念講演会や国交正常化 45 周年をテーマにした特別企画展の開催に向けて準備を進めています。

今後も岡山県が誇る郷土の偉人岡崎嘉平太氏の功績や人間的な魅力を、県内外を問わずより広く深く紹介し、一人でも多くの方に来館いただけるよう情報発信して参ります。



歴研サロン 7 月例会

『中國銀行五十年史より見た銀行の発展と逸話』後編

3 月の講演に続いての後篇です。高橋さんは岡山県金融史の第 1 人者です。是非、ご参加下さい。(すぐです!)

講 師：高橋 義雄

日 時：7 月 12 日 (水) 13 時 30 分～16 時

場 所：ゆうあいセンター 2 階

岡山市北区南方 2-13-1 きらめきプラザ

資料代：500 円

申込先：E メール yanagirousi@gmail.com (丸谷憲二)

F A X 086-806-2525 (山田良三)

携帯電話 090-7130-2636 (長安登美枝)

※会員の講演者を募っています。ご連絡ください。(山田まで)

富久 豊氏 (会員)

小説 3 編目「闇人Ⅱ」 を出版

富久豊氏は「闇人」につづいて「闇人Ⅱ」をこの度出版された。今回は藤原鎌足の子、藤原不比等の生涯を描いている。壬申の乱から日本書紀の完成までが舞台。平安時代に栄華を極めた藤原家の礎を築く話である。岡山県内の主要書店で販売している。1,512 円。(税込)

秋の探訪会の案内

「ひるぜん高天原の探訪」

探訪先：真庭市蒜山 方面

中和神社～長田神社～蒜山郷土博物館～
四ツ塚古墳～塩釜冷泉～ヒルゼン高原
センター～(昼食)～茅部神社・天の岩
戸～蒜山ハーブガーデンハーベル

日 時：10 月 1 日 (日) 7 時～18 時 30 分

(雨天決行)

集合場所：岡山駅西口バス乗降場 6：45、

倉敷駅北口高速バス発着場 7：40

帰 り：倉敷駅 17：30、岡山駅 18：30

参加費：会員 5,500 円、一般 6,000 円 (昼食代含む) 当日集金

参加希望者は

名前、住所、生年月日 (旅行保険用) 電話番号 (携帯電話とも) バス乗車駅を記入の上、下記の申し込み先へ申込みください。(締切り・定員 45 名先着順)

電 話：090-6412-9796 (井上秀男)

はがき：〒710-0803 倉敷市中島 2007-8

(工藤 博)

F A X：086-451-6036 (藤原康正)

E メール：sw225442@tw.drive-net.jp

(工藤 博)

編集後記

定期総会での記念講演は山田方谷の玄孫、山田敦氏に「方谷の人間像」と題して講演をしてもらった。方谷の孫、すなわち山田敦氏の祖父もまた父も大学で教鞭を執られたとのこと。方谷の優秀な血筋が脈々と続いていることを教えてもらいました。山田家に限らず、歴史は脈々と受け継がれている。

会員の富久豊氏が「闇人」に続いて、「闇人Ⅱ」を出版された。今回は壬申の乱から日本書紀が完成するまでが舞台。鎌足の子、藤原不比等の生涯を小説にしたものである。

豊久氏に小説を書く想い、飛鳥時代、平安時代に焦点を当てる想い等について綴ってもらいました。

NHKのテレビ番組「ブラタモリ」で倉敷を紹介した。倉敷の美観地区はなぜ残ったかを紹介した。町

家衆が残すように努力した。中でもクラレ (株) 社長の大原総一郎氏は美術館別館の塀の造りに城塀を思わせる構造を取り入れて街並みを残した。今でも大原総一郎氏がもう 10 年長生きしていてくれればという声は倉敷には多い。(楠)

発 行 岡山歴史研究会

会 長 大田弘之

編集長 楠 敏明

事務局 〒702-8002 岡山市中区桑野504-1

山崎泰二方

自宅電話 (兼用) 086-276-6654

F A X (専用) 086-276-2241

ホームページ <http://b.okareki.net/>